

中日大辞典増訂版

中国へ贈呈式

愛大が完成記念し
1000冊

わが国で最も権威のある中国語辞典「中日大辞典」の増訂版が完成、三十一日午後、名古屋市内の都ホテルで、編さんにあたった愛知大学から、完成を記念して中国の国家教育委員会へ贈られる一千冊の贈呈式が行われた。

初版の中日大辞典は、故鈴木枳郎同大教授を編集委員長に、さる三十年から十三年がかりで編さんされ、四十三年に画期的な中国語辞典として出版された。

しかし、中国の文化大革命や文字の略字、内容などが変わってきたことから、五十年から鈴木教授を中心に、増訂作業が進められてきた。

五十六年には、鈴木教授が志半ばで死去、今泉潤太郎教授（五三）が、恩師の意志を継続。同大へ赴任中の北京語言学院の先生ら中国側の協力を得て作業が進められてきた。

贈呈式は、同大関係者ら三百人が見守る中で、浜田稔学長から駐日中国大使館の陳彬参事官へ目録が手渡された。

陳参事官は「学術的にも高水準の辞典完成は喜ばしい。これも、両国協力の成果」とお礼の言葉を述べた。

増訂版は、A6判、二千七百六十五ページで、収録単語も約三万語増えて、約十四万語となった。

〔注〕中部讀賣新聞 一九八六年六月一日所載。

中日大辞典の 増訂版千冊 愛大が中国へ寄贈

愛知大（本部・愛知県豊橋市町畑町、浜田稔学長）が刊行した中日大辞典の増訂版出版記念会が三十一日、名古屋市中村区名駅の名古屋都ホテルで開かれ、席上、中国の国家教育委員会に千冊贈られた。

中日大辞典は、愛大が十三年かけさる四十三年に刊行。その年の中日文化賞を受けた。増訂版は三十年に着手。「誤りを正し不備を補う」を基本方針に十一年がかりで完成させた。旧版に比べて七百^六増の約二千七百^六、語いは三万語増え十四万語収録されている。B6判で定価は六千八百円。

出版記念会には、編集委員長の今泉潤太郎教授ら約三百人が出席。浜田学長が中国の駐日大使代理、陳彬さん（文化教育担当参事官）に千冊の目録を手渡した。

陳さんは、通訳を紹介し「心から感謝している。中日大辞典は、中国と日本の文化交流の架け橋であり、船である」と礼を述べた。

〔注〕中日新聞 一九八六年六月一日所載。

文化交流の“かけ橋”に

出版記
念会で 中国側に千冊寄贈

愛知大学（浜田稔学長）の中日大辞典増訂版出版記念会・中国国家教育委員会への贈呈式は三十一日午後二時から、名古屋市中村区の名古屋都ホテルで日中両国の関係者、同大学教職員、卒業生ら約二百五十人が出席して開かれた。席上、同辞典編さんの経過報告、中国・南開大学などからの祝電披露のあと、浜田学長から中国大使館大使代理・陳彬文化教育担当参事官に同辞典千冊を贈る目録が渡された。

同辞典は、同大学の前身で中国上海にあつた東亜同文書院大学が戦争中に本格的な中日大辞典の編集を目ざして、日中両国の教授陣が収集した中国語十四万枚の単語カードが、戦後の二十九年に中国から返還されたのをきっかけに編さんが進められた。

同大学では、故鈴木沢郎名誉教授を中心に辞典の編さんを行い、四十三年に初版を刊行した。その後、中国は文化大革命、四人組時代を経て現在四つの近代化路線を推進と大きく変化、五十年までに七刷、約七万冊を発行したが、同年四月に鈴木名誉教授から「中国の変化に対応できる増改訂作業開始を」との意向を受けて増改訂作業が、鈴木名誉教授の教え子の今泉潤太郎教授を編さん委員長に十一年の歳月をかけて進められ、今年四月に完成した。

増改訂作業には北京の新聞社「大公報」の元編集委員で五十五年中国語教員として同大学の赴任した黄異さん（六六）が用語解説で助言するなど、日中両国の語学関係者の協力も得て、五十五年暮れに主な朱直しの作業を終えた。しかし、その直後の五十六年一月鈴木名誉教授が他界し、今泉潤太郎教授が意志を継いで作業開始以来、十一年ぶりに完成にこぎつけたもので、師弟二代の努力の結晶となった。

三十一日の式典で、浜田学長は「増改訂作業には長い時間と日中両国の先生方の努力が積み重ねられた。困難な作業を支援してくれた多くの人々に感謝したい。今後とも日中友好に学術文化の交流にまい進する」とあいさつ。

また、同辞典の贈呈を受けた陳文化教育担当参事官は、「完成した中日大辞典は“語い”も豊かで、高い学術的レベルにある。学術的な面で重要だけでなく、中日文化交流のかけ橋であり、舟でもある」と賛辞を送り盛んな拍手を受けた。

〔注〕東海日日新聞 一九八六年六月一日所載。

「中日友好の懸け橋に」

中日大辞典増訂版の贈呈式

愛知大学（浜田稔学長）が十一年の歳月をかけて刊行した「中日大辞典」増訂版の出版記念会と中国国家教育委員会への贈呈式が三十一日、名古屋市中区の名古屋都ホテルに同窓生、企業関係者ら約三百人が集まって催され、浜田学長が駐日中国大使代理の陳彬・文化教育担当参事官に千冊分の目録を贈った。

記念会で浜田学長は「中国にも大きな変化があるなどで増補、改訂したが、これをきっかけに、さらに中国語学習、日中の友好、交流に努力したい」とあいさつ。編集委員長を務めた今泉潤太郎教授が編集の経過を紹介、浜田学長が陳参事官に目録を贈った。これを受け、陳参事官は「大辞典の語いは豊富で、最新の資料に基づき解釈は正確。今後の影響は大きい。単に学術のためだけでなく、中日友好の懸け橋、船になる」と強調した。

中日大辞典は東亜同文書院大作成の十四万枚の資料カードをもとに、三十年に出版を計画、四十三年に完成。増訂版は五十年に編集を始め、このほど、七百〇増の二千七百〇〇、親字二千字増の一万三千字、語い三万増の十四万語として結実、大修館書店から出版された。

〔注〕朝日新聞 一九八六年五月三一日所載。

三百人招いて中日大辞典増訂版の贈呈式

愛知大学

「中日大辞典増訂版出版記念会・中国国家教育委員会への辞典贈呈式」が五月三十一日、名古屋駅前の名古屋都ホテルに来賓の本山政雄名古屋国際センター理事長、平岩利夫名古屋市助役ら約三百人が出席して開かれた。主催は愛知大学。

今回の「増訂版」は、一九六八年刊行、内外から高い評価を受けた「中日大辞典」を十一年余かけて増補改訂したもの。中日両国関係者の大変な労力で、二千七百六十五ページ、語彙(い) 十四万語と旧版にくらべ大幅に充実された。

席上、浜田稔学長から陳彬中華人民共和国駐日大使代理に一千冊(目録)が贈られた。

ひきつづき「現代中国への視点」と題する小林一夫NHK解説委員(元北京支局長)の記念講演を聞いたあと、中国歌舞団「華音」のアトラクションで和やかに歓談した。

〔注〕 中部経済新聞 一九八六年六月一日所載。

待望の中日大辞典増訂版発刊

Ⅱ 出版記念会行われるⅡ

中国語学習者によって待ち遠しかった中日大辞典の増訂版が十八年ぶりに発刊された。

中日大辞典は、日本はもとより中国でも高い評価をうけたが、中国の発展は目覚しく、それに伴い新しい言葉も増加し、『新時代』を盛り込んだ辞典の出版が強く望まれていた。

増訂版の上部欄外には、そのページの親字が記載され、大変便利になった。又、六百ページも増え、「経済特区」(経済特別区)、「万元戸」(年収一万元以上の家庭)等の新単語も登場している。

この待望久しかった中日大辞典増訂版出版記念会・中国国家教育委員会への贈呈式が、五月三十一日(土)、午後二時から名古屋都ホテルで、編纂を担当した関係者、日本・中国各界の代表者、そして愛知大学同窓生・在校生二百余名が出席し盛大に行われた。

出版記念会・贈呈式は銀嶺の間で、浜田愛知大学学長の挨拶で始まり、今泉教授の増訂版編纂経過の報告があったあと、愛知大学と友好関係にある中国の五大学(天津・南开大学、北京語言学院、北京第二外国语学院、上海・復旦大学、上海外国语学院)の各学長からの祝電披露、そして日中文化交流協会(井上靖会長)からの祝電披露があった。

中国国家教育委員会を代表して、駐日中国大使代理の参事官陳彬氏が寄贈目録を受け取り、挨拶をされた。

又、愛知大学卒業生でNHK解説委員・元北京支局長の小林一夫氏が「現代中国への視点」と題する記念講演をされた。

次に紫雲の間に場所を移して記念祝賀会が開かれた。鈴木大修館書店副社長の挨拶で始まり、増訂版出版に大きく貢献された、元中日大辞典編纂委員長故鈴木沢郎教授夫人、本間喜一愛知大学名誉学長、北京農業機械化学院故黄志明教授の弟黄異愛知大学教授、そして編纂委員長今泉潤太郎教授に、中日大辞典刊行会から感謝の花束が贈呈された。そして青木愛知大学同窓会会長が乾杯の音頭をとったあと、中国歌舞団「華音」の演奏を聞きながら歓談を楽しんだ。

〔注〕一九八六年六月十五日「日本と中国」愛知県版 所載。

「中日大辞典」増訂版を編集した

いまいずみ じゅんたろう
 今泉 潤太郎さん

約十四万の単語を収録した「中日大辞典」増訂版が愛知大学から刊行された。「日中友好の財産」。中国側からも絶賛を受けた。

「私が編集委員になったのは巡り合わせ。鈴木沢郎先生（故人）の手が入っていますし、私が前面に出るのはどうも……」。大事業の達成にも謙虚に語る。

愛知大学の母体・東亜同文書院大（中国）教授だった鈴木愛知大教授が編纂（さん）に着手したのは、生まれた年の昭和七年。鈴木教授との出会いが地元の愛知大学に入学してから。専攻の中国文学は学生一人で、鈴木教授とのマンツーマン授業が続いた。

終戦で中国側に没収されていた単語カードが愛知大に返還され、三十年に愛知大華日辞典編纂処が設置、辞典づくりが再スタート。この年に卒業し、そのまま編纂処入りした。

四十三年に発刊された初版は、評価を集めたが、文化大革命後は社会情勢が一変した。「辞典が古くなり、十一年前に鈴木先生が中心となり、増訂作業が始まったのです」。

が、鈴木教授は五十六年一月、志半ばで死去。編集委員長として指揮をとっていたが、恩師の“加護”から解かれて陣頭に。「先生の遺志を継いで」と休みを返上して作業に追われてきた。

初版の弱点だった「マルクス主義の理解に欠けるための用語の違い」も補って四月に刊行。肩の荷が下りたかと思えば、「中国側の用語統一に伴う手直しもあり、今も圧迫感が」と表情を引き締める。

細かい作業の後遺症か、視力が落ちた。老眼だ。眼鏡をかけ、さらに天眼鏡を使う。「そういえば鈴木先生も」。辞典に生涯をささげた鈴木教授の姿がダブって見えた。

〔注〕朝日新聞「顔」 一九八六年五月所載。